

第一回歩き遍路 讃岐ノ巻

2015年5月16日～5月26日

66番雲辺寺～88番大窪寺（結願）～高野山・奥之院

遍路距離 241km



昨年夏の阿波「発心の道場」23霊場に始まり、土佐「修行の道場」16霊場、伊予「菩提の道場」26霊場を巡って、愈々最後の「涅槃の道場」・讃岐23霊場に辿り着いた。

「発心」はしたものの、「修行」にも励まず毎晩毎夜般若湯に溺れた遍路道中であったから、従って「菩提」の境地のトバ口にも至っていないので、「涅槃」などという有り難い御利益は期待すべくもないが、マ、結願寺の88番迄歩けば、或いは何らかの瑞兆でも顕れるかも知れないという安直な夢幻^{ゆめまぼろし}を背負って歩き始めた。通し打ち*歩き遍路を既に2回も結願された同じ山岳会のH女史などは、山中の遍路道で逢いたかった鬼籍に入られた御主人やご先祖様と会うことができたとっておられたが、マ、小生が遭えるのは地獄の鬼卒くらいであろうか。（*通し打ち=四国88霊場を一気通貫で歩くこと、所要約50日間。「打つ」というのは、昔は木の板に書いた納め札を寺の柱などに釘で打ちつけていたことから、遍路巡拝することを「打つ」と言うようになった）

小生は前世の因縁が悪くまた今世でも悪行の限りを尽くしてきたので、極楽浄土などには全く縁がないだけでなく、昼は血の池で溺れ、夜は地獄の閻魔様の業火に焼かれる業深い衆生ではあるが、ひょっとして結願寺

の88番大窪寺迄歩いて西方を向いて拝めば、或いは「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」の口で、お迎への「山越阿弥陀仏」の御姿でも拝めるかと・・・。夢幻能の謡曲「鶺鴒」*の最後にもあるではないか。『・・・たとひ悪人なりとて、慈悲の心を先として、僧会を供養するならば、その結縁に引かれつつ、仏果菩提に至るべし。げに往生の利益こそ、他を済くべき力なれ、他を済くべき力なれ』



(地獄絵)



(山越阿弥陀来迎図)

* [能「鶺鴒」のあらすじ]

阿房国(千葉)の僧が従僧を伴い、甲斐国石和を訪れる。一行は在所の男に教えられた川辺の御堂に一晚を過ごすことにするが、その夜、松明を持った鶺鴒使いの老人が姿を見せる。話すうちに従僧がかつてこの地を旅した際、よく似た鶺鴒使いに一宿一飯の恩を受けたことを思い出すと、老人は「その鶺鴒使いは後に禁漁の石和川で鶺鴒を使って漁をしたために、仲間たちの私刑に遭い簾巻きにされて川に沈められて殺されました」と語り、実は自分こそがその死んだ鶺鴒使いの亡霊なのだと名乗る。

老人は僧の求めに応じて懺悔のためにかつての鶺鴒の業を披露する。その面白さに老人は殺生の罪も忘れて酔いしれるが、やがて闇の中に姿を消す。改めて在所の男から事情を聞いた僧たちは河原の石に一字ずつ「法華経」の経文を記し、それを川に沈めて鶺鴒使いの老人を供養する。するとそこに地獄の鬼が現れ、鶺鴒使いが無事に成仏を遂げたこと、そしてそれを可能にした「法華経」の功德のありがたさを称えて舞う。



(能「鶺鴒」)

【5月16日】 曇り／雨

自宅～伊予三島～別格 14 番霊場椿堂（常福寺）～境目トンネル～徳島県三好市池田町白地（旧阿波池田町）

自宅を早朝に出発、小田原駅発午前6時の新幹線で岡山駅経由昼前に伊予三島駅着。雨模様の中をトコトコと歩き始めた。前回の伊予編の最後に伊予三島の町は歩いていたので、同じ道を今日は讃岐最初の霊場、66番雲辺寺を目指して愛媛・徳島・香川の3県境を越えて雲辺寺登拝口がある阿波池田に入るのである。

途中の境目峠の手前に別格 14 番霊場椿堂があったので寄った。歩き遍路には納経料無料、おまけに缶コーヒーのお接待まで頂いた。喉が渴いていたので美味かった。88霊場のお寺では遍路がお接待に与えることは珍しいが、辺鄙な場所にある別格霊場では、お茶や蜜柑やアメ玉などのお接待を頂いたり、納経所で四方山話に花が咲いたりすることも多い。有り難いことである。



（椿堂。山門が鐘楼を兼ねている珍しい寺）

この椿堂の付近はフォッサマグナから九州に伸びている列島の中央構造線が四国を通っている場所だそうで、右のような標識があった。興味があったが先を急いでいたので見られなかった。この写真の石垣の積み方はちょっと珍しい積み方と思うが、ひょっとして中央構造線の断層から想を得たのかも・・・。

椿堂からは、山中のウネウネとした国道132号を県境の境目峠に向かって登って行った。今回の初めての遍路道中は、歩き遍路とはいえ、泊りは全て旅館・ホテル・民宿泊まりであったから、何としてもその方面の苦勞がない。苦勞がないということは、即ち苦行も無く、従って御利益もないということなので、次回の遍路はオール野宿の通し打ちでと秘かに考えているので、今回の讃岐路の遍路道中では特に野宿できる場所を探しながら行くこととした。

椿堂から先は、山間の斜面に猫の額のような田畑が広がっている長閑な山村であるが、そこには次頁のような遍路小屋があった。遍路道沿いに設置されている遍路小屋は、遍路協会や地元の方々の好意で維持管理されているが、どこも掃除などが行き届いて気持ち良く休憩できる。ごろ寝なら宿泊もOKらしい。ただ、夏場は蚊が多いのが難点ではある。

さて、境目峠に差し掛かると、今度は廃バスを利用した善根宿があった。善根宿というのは、歩き遍路用に無料か安価で宿を提供してくれる小屋や民宿である。食事が付くような善根宿は一泊2食付で3000円程度



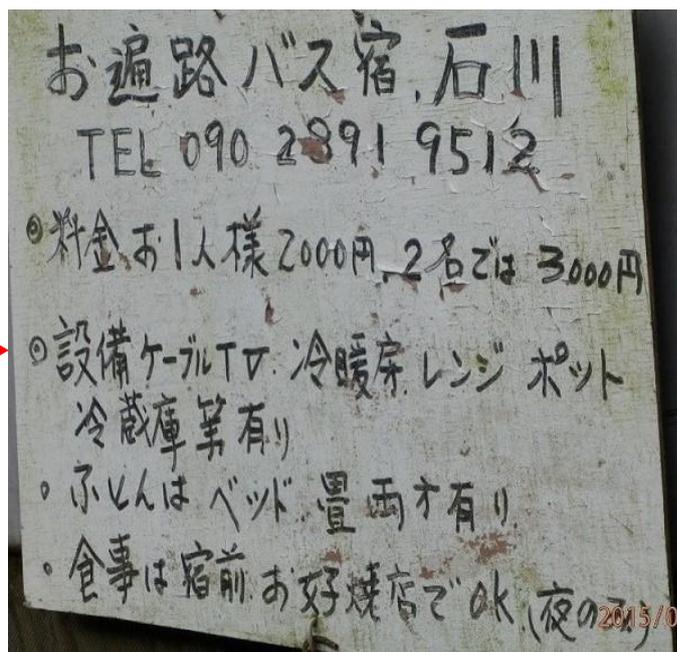
であるが、どこにでもあるというものではなく、数が限られている。私も、阿波の焼山寺の麓で善根宿に泊めて貰ったことがあり、食事はサンマー匹程度の素朴なものではあったが、宿の御主人夫婦のホスピタリティーもなかなかによろしかった。



(遍路小屋、しんきん庵・法皇)



(同 内部)



上の廃バス利用の善根宿は、いつかテレビで外人遍路の道中放映をやっていた時にも写っていたものであり、善意で設置されているものかも知れないが、宿泊料金を払ってまで泊まる気は起きなかった。

どうせ泊まるなら、前頁の写真のような遍路小屋で稲田を渡る涼風に吹かれたり虫の声でも聴きながらゴロ寝でもした方がマシというものではなからうか。

さて、話が横道に逸れたが、本道に戻ろう。境目峠は伊予・阿波・讃岐の県境で、山深いところであった。標高も4百メートルほどあるので、登り坂も結構キツイ。この辺りには松山自動車道、高知自動車道、徳島自動車道の3高速道路が交差する川之江ジャンクションがあり、徳島自動車道の新境目トンネルがこの境目峠の下を潜っている。

峠を越える国道のトンネルは、国道とは名ばかりの狭い幅員のトンネルで歩道も30cm程の幅しかない。おまけに長さが1kmくらいあったので、ゴーゴーという大音声でトンネルに反射する車の騒音と今にも轢き殺されそうになる恐怖で心ノ臓が止まりそうになった。トラックが通る度にヤモリの如く壁に貼りついてやり過ごすのであるが、壁は排気ガスで真っ黒になっていて体中が煤だらけになった。トンネルを抜け出るまでの20分間ほどは全く生きた気がしなかった。恐怖で動悸が高まって今にも心ノ臓が破裂してお陀仏になるのではないかと思われた。

遍路道中で何が一番怖いと言えば、トラックやダンプなどの交通量が多い山中の国道で、しかも歩道が無い区間を歩くのが一番怖い。国道と言えども、山中では歩く人はいないから歩道などというシロモノは必要が無いのであろう。しかも山中の道路はウネウネと曲がっているので出合頭に車とぶつかりそうになったことも再三ではなかった。

伊予の久万高原にある第44番大寶寺から山道越えて第45番岩屋寺に越えたことがあった。既に闇夜となって山道も見えず、おまけに雪が降り出した時も怖かったが、雪道を踏み迷うといことはあっても、山道では車に轢き殺されるという心配はない。

本日は明日登拝する讃岐最初の霊場、第66番雲辺寺の徳島県側の池田町佐野の登拝口にあるたった一軒の遍路民宿「岡田屋」に泊まるしかないのだが、ここは満員で泊まれなかった。ここから車で30分の距離にある阿波池田の白地という所にある民宿「白地荘」を紹介された。ここも満室だったが、何とか相部屋に泊めて貰うことができた。岡田屋から白地荘までは白地荘の車で送迎があり、翌朝は岡田屋近くの登拝口まで送ってくれた。相部屋の遍路氏は東京から来たという同年輩の人であったが、彼は夕食を喰うか喰わない内に寝てしまったので四方山話をする機会は無かった。白地荘は、阿波池田の吉野川源流部での釣りや川遊びやラフティング客がメインであるそうだが、最近は夏場以外は佐野の岡田屋で溢れた遍路客が殆どとのことだった。阿波池田には遍路霊場はないから、昨日ピックアップしてくれた岡田屋まで車で送り戻してくれるのである。

池田町白地「民宿・白地荘」6,500円。食事マアママ、応対良。但し、山の中にあるので蚊が多い。

11:00 伊予三島駅前発、途中昼食30分、14:40 椿堂、17:00 佐野（岡田屋）、送迎車で白地荘へ。

本日の遍路距離=20km

【5月17日】 晴れ

徳島県阿波池田民宿～雲辺寺口～66番雲辺寺～香川県・別格16番萩原寺～67番大興寺

「はるばると雲の^{ほと}辺りの寺に来て
月日を今は麓にぞ見る」（雲辺寺御詠歌）。

雲辺寺は山また山の中であった。瀬戸内海沿岸部にあるので北側には懸崖が足下に光って見えたが、南側には重畳たる四国山脈阿波の山並みが遙か薄墨の中に重なっていた。ため息が出るほどの美しい風景であった。思わず「♪はるばる来たぜ、雲辺寺・・・♪」と北島三郎ばりに唸ってしまった。今回の88箇所では山中の寺にも随分巡礼したが、このような見事な山の光景は初めてであった。



（雲辺寺から重畳と重なった阿波の山並みを望む）

雲辺寺は阿波ノ国と讃岐ノ国の境にあり行政上は徳島県側であるが、四国遍路では讃岐の霊場に数えられ、讃岐「涅槃の道場」第1番霊場とされている。

池田町佐野の雲辺寺登山口から標高差600mの山道をウンウン言いながら3時間ほど登って来た。取り付きの山道は急勾配の連続で息が上がってしまった。雲辺寺は標高910m、四国88箇所が一番標高が高い場所にある。香川県観音寺市側からはロープウェイが通じていて、観光バス遍路はロープウェイで登って来る。

境内の参道には五百羅漢像が並べられていて、その表情が生き生きしていて面白かった。仏像は菩薩のような慈悲に満ちた表情の仏様もあるが、大概は仁王像のような憤怒の表情や、四天王のような難しい表情をした仏様が多い中で、ここの羅漢像のようにユーモア溢れる表情をした像を見ると何か心が和んで来て、それだけでも御利益があったような気がしてくる。マ、衆生にとってはこのようなことが仏果であるとするれば、信者獲得策としても効果的な戦略ではなかろうか。



(四国霊場第66番「巨龍山 千手院 雲辺寺」)



(雲辺寺 御詠歌)

頭上を通過して行くロープウェイを恨めしく見上げながら、山道をトコトコと雲辺寺から下って行った。落ち葉の絨毯のプロムナードコースではあったが、展望は全く得られない谷筋の山道であった。ロープウェイ下駅にあった讃岐うどん屋に入ってビールで喉を潤し、讃岐手打ち素うどんを喰った。うどんは安かった。

午後は蜜柑の段々畑の中の農道をギラギラ照り付ける太陽に炙られながら別格16番萩原寺から67番大興寺まで歩いた。

萩原寺は「巨龍山 地蔵院 萩原寺」で、雲辺寺と同じ山号である。寺伝によれば、かつて弘法大師がこの地に修行した時、麓には地蔵菩薩を祀った前寺を、また山頂には千手観音を安置した奥之院を開基した。前者が萩原寺、後者が雲辺寺となったと伝えられている。萩原寺は番外札所なので遍路の巡礼は少ないが、地元民の帰依が厚く、また茅葺の本堂は重要文化財に指定されている大きな寺であった。折から年に一度の門前市が開かれていた。かつては近郷のみならず四国全域から大勢が集まる有名な市であったらしいが、今は次頁の写真のようにフランクフルト屋、駄菓子屋、古着屋、古道具屋、チャンバラ屋など閑散として素朴なものであった。



(茅葺の萩原寺本堂)

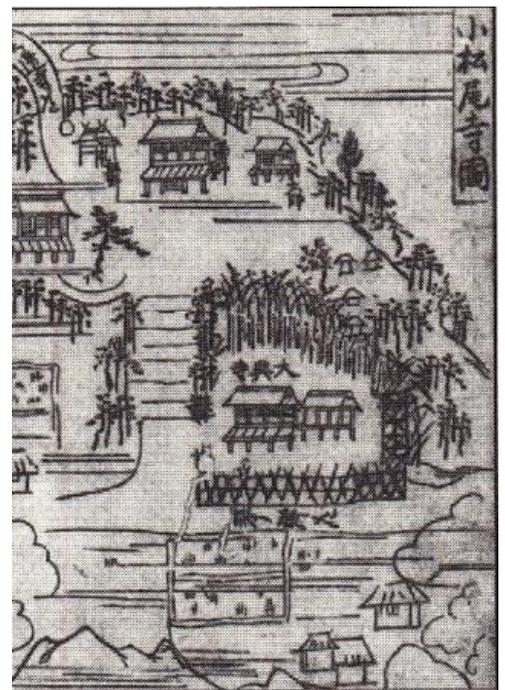


↑ (折から開かれていた萩原寺門前市) ⇒



萩原寺からは県道をトコトコ歩いて夕方に67番大興寺に着いた。この寺は真言宗と天台宗が同居していた珍しい寺*で、元禄時代には出版された四国遍路ガイドブック『四国徧礼霊場記』によればかつては真言宗の寺院が24房、天台宗の寺が12房あった大寺で、「台密二教講学の練衆、^{くじか}響のごとく群をなせりとなん」と書かれている。寺勢が盛んだった時代には学僧達が鹿の群れの如く集まって、真言、天台の教学を競ったという訳である。今でも弘法大師の大師堂と天台大師の天台堂の二堂が同居している極めて珍しい寺である。

上記の『四国徧礼霊場記』に載っている寺圖は右のようになっていた(図中の「小松尾寺」というのは大興寺の俗称)。門前には水田や民家が描かれていて、聚落の真ん中であつたらしい。今も同じような風景の中にあつた(下の現在の写真と見比べられたい)



(←大興寺山門)



* (注) 四国88霊場は殆どが真言宗であるが、内7霊場は天台宗や臨済宗などの他宗の寺院である。また、かつて2宗同居だった寺院はこの大興寺を含めて2寺だけである。真言宗と浄土宗が同居していた寺は全国的にもよくあるが、真言宗と天台宗が同居していた寺院は極めて珍しいようだ。真言宗の開祖空海と天台宗の開祖最澄は平安時代初めに共に中国・唐で学んだ同窓の学僧であるが、教えの違いなどから疎遠となり、両宗派も長年交流が途絶えていたことから、台密二教講学は成り立たなかったであろう。

6:00 民宿「白地荘」発 (送迎車)、6:15 雲辺寺登山口、8:45 雲辺寺、9:30 同発、途中の山道で30分間パンを立ち喰い、11:50 ロープウェイ下駅・うどん昼食、12:20 同発、13:15 萩原寺、13:45 同発、16:00 大興寺、 民宿「おおひら」泊。

「おおひら」6,500円、飯は普通、対応良。

本日の遍路距離=19km

【5月18日】 曇り⇒雨

大興寺～68番神恵院～69番観音寺～70番本山寺～香川県三豊市高瀬町 (高瀬駅前)

本日の遍路道中は、海岸の砂浜に掘られた巨大な銭型「寛永通宝」で有名な観音寺市に入った。田園地帯の県道を観音寺に向かって歩く。途中の道端には円形の遍路小屋があった。ここも清潔に掃除されていて気持ちがいよ小屋であった。

神恵寺と観音寺は同じ境内にあり、山門も共同であった。納経も同時に二寺分をしてくれる。観音寺の裏山の展望台に登れば、砂浜の巨大な銭型が足下に望めた。



(銭型遍路小屋)



(神恵院と観音寺の山門は共通)



(観音寺海岸の砂浜に彫られた寛永通宝の巨大な銭型)

観音寺から財田川の土手を歩いて70番本山寺に至った。この寺は四国88霊場でただ一寺、馬頭観世音菩薩（馬頭観音）が本尊である。また、本堂は平安初期の建立、香川県では唯一の国宝寺院建築である。一方、仁王門は平安末期の建立。和様、唐様、天竺様が混淆したどっしりした八脚門の門構えは国指定重要文化財であるそうだ。また、洗練された五重塔は遠方からでもひとときわ目につく。全体的に均整のとれた美しい寺であった。



馬頭観音（頭上に馬）



（遠方からも目立つ本山寺五重塔。人物は前を行く遍路）



（八脚門の仁王門と五重塔）

7:00 民宿「おおひら」発、9:00 銭型遍路小屋、10:30 神恵院・観音寺、11:30 同発、12:50 本山寺、13:30 同発、途中「スシロー」で昼食30分、16:00 三豊市高瀬町 JR 高瀬駅前 高瀬駅前「千歳旅館」泊

〔千歳旅館〕6,500円。建物は古いがhospitality最高。部屋食でおかみさんがビールの酌をしながら話し相手をしてくれた。飯もマズマズ。汗臭い猿股も遠慮せずに出せと洗濯して下さった。客は小生のみ。

本日の遍路距離=20km

【5月19日】 曇り／晴れ

高瀬駅前～71番「弥谷寺」～天霧八王山・奥之院～
別格18番「海岸寺」（善通寺奥之院）～72番曼荼羅寺
～73番「出釈迦寺」～院我拝師山（出釈迦寺奥之院
「捨身ヶ嶽禅定」）～善通寺駅前

旅館を出てから田園地帯の道を弥谷寺目指して歩いて行った。途中の民家の庭先には右のような古い遍路道標もあった。急に腹具合がおかしくなって便意を催したが逃げ込む場所がない。廃屋になった民家の庭の叢の奥に駆け込んで急いで野糞を垂れた。紙を出す余裕もなかったので、そこに生えていた草の葉で拭いた。



弥谷寺は死者の亡霊が集まる寺だそうで、そういう目で見ると確かに死霊がそこここに潜んでいるような霊気漂う寺であった。懸崖には磨崖仏が彫られていた。弥谷寺のある弥谷山は、古来より霊山（仏山）として信仰され、恐山、臼杵磨崖仏と共に日本三大霊場の一つに数えられているそうだ。

弥谷寺からは、天霧峠を越えて多度津の別格18番海岸寺に下った。弥谷寺納経所の話では天霧峠越えの山道は崩れて廃道になっているので絶対に入らないようにと注意されたが、ナニ、このような廃道を辿ることこそ遍路の本義ではないかと踏み込んで見た。確かに途中で山道が全く消えていて藪漕ぎを強いられたが、要所要所には苔むした昔の丁石観音が草に埋もれていて、かつては海岸寺から弥谷寺に巡礼する遍路道が栄えていたことを物語っていた。天霧峠を越えた狭い峪の崖に弥谷寺の奥之院である「天霧八王山奥之院」がひっそりと建っていた。以下、スライド風に。



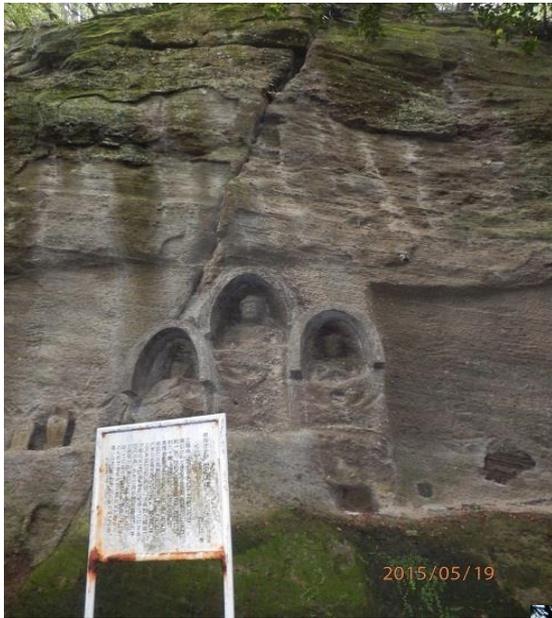
(弥谷寺は奥の山中にある)



(弥谷寺への道。この辺りからして既に死霊の世界?)



(弥谷寺山門。どことなく霊気が漂う)



(空海が修行したとされる獅子の岩屋)

← 弥谷寺・弥陀三尊磨崖仏



(天霧峠)



(天霧峠を少し下ると讚岐富士が姿を見せた。愈々讚岐平野へ)



(天霧八王山奥之院)



(同 内部)



(天霧八王山奥之院の麓から多度津港と瀬戸内海が見えてきた。後方は備讃諸島の島々)

別格18番「海岸寺」は75番善通寺の奥之院で、海岸に面した境内も広い大寺であった。しかし、今は貧寺で、仁王門は造ったがそこに安置する仁王像を購入する資力なく、致し方なく郷土出身の琴ヶ浜など2力士の像を彫刻家に彫って貰って仁王像の替りに安置しているという珍しい寺であった。マ、仁王像は金剛力士像ともいうので、相撲の力士も仁王の同類ではあろう。

寺には掃除のオバサンが一人、所在なさそうに掃除をしているだけで僧侶や寺人などの姿は無かった。遍路の姿は影も形も無かった。納経所なども無く、このオバサンが本堂の階段の隅でチョロチョロっと書いてくれただけだったが、ご親切にもアメ玉のお接待に与った。



(海岸寺の仁王門と相撲力士像)

この寺のすぐ山側にこの寺の奥之院があった。素朴な寺ではあったが、裏山に三重塔を配した由緒ありそうな寺であった。納経所の人によれば、此処は空海の母「阿古屋」（玉依御前）の実家「阿刀家」があった場所で、空海はここで生まれたのだそうだ。産湯を使った井戸跡というのもあった。一方、善通寺も「空海の誕生地は我が善通寺」と言っていて、善通寺にも産湯井戸なるものがあった。どちらが本物かは分からないが・・・。



(海岸寺奥之院)



(同 空海の産井)

海岸寺からは内陸側の善通寺市に向けて南方に歩き戻った。善通寺市内には狭い範囲にゴチャゴチャと曼荼羅寺、出釈迦寺、甲山寺、善通寺、金倉寺の5霊場が並んでいる。本日の午後は、この内の曼荼羅寺と出釈迦寺、及び出釈迦寺奥之院の我拝師山「捨身ヶ嶽禅定」の3霊場を廻った。これらの寺は、善通寺郊外の丘陵地帯にあり、周りは田圃で長閑な風景であったが、日陰も無い田圃の中の遍路道は真夏並みの太陽に炙られて汗だくになった。



(曼荼羅寺)



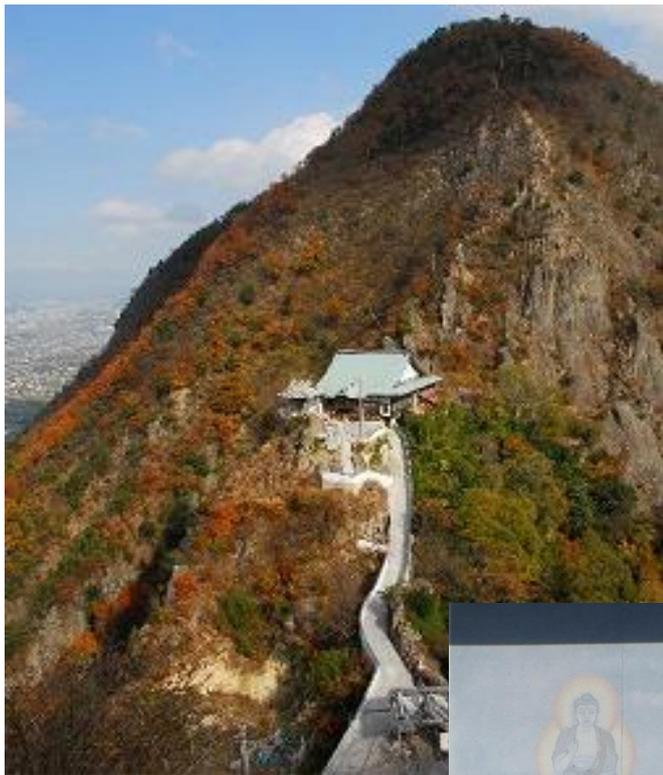
(出釈迦寺)

7 2 番曼荼羅寺と7 3 番出釈迦寺は500mほどしか離れておらず、また山号は何れも我拝師山^{がはいしきん}である。元々この二寺は同じ寺であって、上側にある出釈迦寺は下側にある曼荼羅寺の奥之院であった。また、この二寺の裏山となっている我拝師山には更に出釈迦寺の奥之院「捨身ヶ嶽禅定」があった（今もある）。

出釈迦寺から1時間程急坂を登った我拝師山の肩には断崖絶壁があり、空海が幼少の頃ここに登り「私は将来仏門に入り、仏の教えを広めて多くの人を救いたい。私の願いが叶うなら釈迦如来よ、姿を現したまえ。もし叶わぬのなら一命を捨ててこの身を諸仏に捧げる」と、断崖絶壁から身を投じた。すると、紫色の雲が湧き、釈迦如来と羽衣をまとった天女が舞い降り、雲の中で弘法大師を抱きとめた。命を救われ願いが叶うこと

を示された空海は、青年になって我拝師山で虚空蔵菩薩像を刻んで安置し堂宇を建てて禅定した。この場所が「捨身ヶ嶽禅定」であり元は札所であったが、今は出釈迦寺奥之院「禅定院」となっている（今は無住）。

捨身（舎心）とうのは、断崖絶壁の岩場の上に座って修業したり、またその岩から飛び降りる苦行（または衆生を済度する為に飛び降りて死ぬこと）のことであり、この場所を捨身ヶ嶽（舎心ヶ嶽）という。四国88霊場で空海がこの捨身を行ったとされる捨身ヶ嶽は2箇所あり、一つは阿波の21番霊場太龍寺の舎心ヶ嶽、もう一つがこの我拝師山捨身ヶ嶽である。前者には時間の都合で行けなかったため、ここの捨身ヶ嶽には是非行きたいと思っていたので、急坂を大汗を掻きながら登ってみた。出釈迦寺から駆け上り駆け下って往復1時間。讃岐平野や多度津・丸亀の海が足下に見える我拝師山の肩には、禅定院の山門、堂宇と鐘楼があり、裏には断崖絶壁の岩場もあった。ここが空海が修行した「捨身ヶ嶽禅定」である。



（我拝師山と捨身ヶ嶽禅定院）



（我拝師山の肩にある禅定院の山門）



7:00 高瀬駅前・旅館発、8:45～9:30 弥谷寺、9:45 天霧峠、
10:20 天霧八王山奥之院、11:50～12:15 海岸寺奥之院&海岸寺、
途中道迷い&遍路小屋「多度津おかのやま」パン立ち喰い昼食1時間、
14:20 曼荼羅寺、14:40～15:00 出釈迦寺、15:45～16:15 捨身ヶ嶽、
16:30～16:50 出釈迦寺、18:30 善通寺駅前

善通寺ステーションホテル泊（安価3,500円、非常に良）

本夕の般若湯＝焼鳥「寅屋」（3500円）

（伊予の“鉄板”焼鳥とは異なり、炭火で焼く普通の焼鳥）

本日の遍路距離＝22km



【5月20日】 晴れ

善通寺駅前ホテル～74番甲山寺～75番善通寺～金刀比羅宮～満濃池～別格17番神野寺～善通寺駅前

善通寺市街近くの74番甲山寺、75番善通寺を巡拝した後、折角善通寺に来たので遍路道からはかなり逸れるが1日を余分に費やして、序に金刀比羅宮、空海が造ったと言われる満濃池、満濃池の傍にある別格17番神野寺まで足を延ばすことにした。

善通寺は正式には「屏風浦五岳山誕生院善通寺」という。五岳というのは善通寺の裏に連なる標高500mほどの連山で、昨日登った捨身ヶ嶽の我拝師山、筆ノ山、香色山、中山、火上山を言い、これらが善通寺付近の海岸沿いに屏風のように並んでいるので、「屏風浦五岳山」という山号が付いた。また、空海が生まれた場所であるということから「誕生院」という院号が付いた（昨日廻った善通寺の奥之院だった海岸寺も空海の誕生地と称しているが・・・）



（善通寺駅方面から善通寺、五岳方面を望む）

金堂や五重塔が建ち並ぶ「伽藍」と称される東院、弘法大師が生まれた佐伯家の邸宅跡の「誕生院」、併せて1万5千坪に及ぶ広大な寺域は四国88霊場中最大の規模であり、かつてはこの善通寺が四国遍路第一番霊場であったそうだ。見るべき文物も多いとのことであるが、この日は中国人の観光バスがやって来ていて、大声で喚いてとても巡拝できる雰囲気ではなく喧しくて仕方ないので、御影堂の地下に掘られた戒壇巡りだけをして早々と退散した。戒壇巡りは百メートルほどの長さであったが、中は全くの闇で周りの壁を手探りで触って歩を運ぶしかないのだが、上下



(善通寺)

左右の感覚も無くなってしまふような、浮遊物体となったような、魂もどこかに飛んでしまったような妙な気分になってきて心身ともに気持ち悪くなったのには往生した。心ノ臓もパクパクとしてきて今にも爆発しそうになってきた。寺のパンフによれば、この戒壇を巡る人は大師の御心に抱かれて安堵の気持ちに至るとあるが、私のような悪人にはそのような御利益は顕れないのであろう。嗚呼。

今日の予定は、遍路は朝一番に巡拝した74番甲山寺とこの善通寺だけで、後は金毘羅宮と満濃池への謂わば遠足あるから、善通寺からJRで琴平駅まで行って金毘羅さんにお参りした。金毘羅宮は、サンスクリット語の「クンビラ」からの由来だそうだ。クンビラと言えばヒンズー教徒にとっては一番大切なワニ神であり、ネパールのナムチェバザールの奥のクムジュン村に聳える岩山も同じくクンビラ山と名付けられている。この岩山は標高はヒマラヤでは低山に属する5,765mしかないが、ヒンズー教徒にとっては神聖にして犯すべからざる聖山であって今でも登山は許されていない。



(ネパールヒマラヤのクンビラ山。シャンボチェから)



(金毘羅宮本宮)

金毘羅宮は海の守り神として全国から信徒が集まったそうで、山の中腹まで迄壮大な伽藍が並んでいた。重機などと言う代物が無かった昔によくもまあこれだけの建物を建てたものと感心せざるを得ない。信徒からの喜捨の資金が莫大であったのだろう。絵馬の替りに大きな船の供物なども沢山奉納されていた。

たぶん建築資材などを運ぶための道だったのでろうが、本宮まででも900段ほどの石段が造られていた。更に奥社までの石段は1400段になるという。麓から本宮まで登るのに1時間近くも掛かってキツかった。



(参道にはこういう乗り物もあった)



(本宮から讃岐平野を一望。中央左奥は讃岐富士)

満濃池は、水不足で困っていた讃岐平野を灌漑するために弘法大師が杖で掘った溜池と伝えられている。満濃池のお蔭で讃岐の水不足は解消し、大師は報奨金を下賜されたが、善通寺の近くにある四国霊場第76番札所金倉寺はこの報奨金で創建されたと言われている。丘陵地帯の入り組んだ地形に満々と水を溜めた姿は大師が造ったと言われればなるほどナと納得させられるくらいの神々しさがあった。地元の人々がこれからの田植えの放水に備えて池の周りの掃除をしていたが、立ち話での雑談の中にもこの満濃池に対する地元の方々の感謝と畏敬の念が感じられて清々しかった。

満濃池の池畔には別格17番神野寺があり、そこにも巡拝してきたが、この辺りまで来る遍路は極端に少ないようで、閑散としたものだった。



(満濃池)

8:30 ホテル発、9:10 甲山寺、9:45~11:00 善通寺⇒JR 電車で琴平駅、11:50~14:00 金毘羅宮、JR 電車で琴平駅⇒塩入駅、15:00~16:20 満濃池、塩入駅前食堂でビール&ソーメンの遅い昼食、17:30 善通寺駅、善通寺ステーションホテル連泊。今晚の般若湯は「魚七」に行くも酒食進まず、ビール1本とツマミ1皿のみ、1,400円。

本日の遍路距離=50km (満濃池往復含む)

【5月21日】 晴れ、涼、爽やか

善通寺駅前～76番金倉寺～77番道隆寺～78番郷照寺～79番高照院～80番国分寺

本日は特記事項なし。記載割愛。

7:00 善通寺駅前発、7:40 金倉寺、9:10 道隆寺、11:30 郷照寺、門前の料亭「公楽」にて1時間昼食(唐揚げ定食&ビール2本、1900円)、15:10 高照院、15:30 JR 八十場駅(国分寺の納経時間に間に合わせるため乗車)～15:40 国分駅下車、16:00 国分寺、国分寺門前「ゑびすや」泊(6500円、洗濯サービス、食事良、応対良、届かなければキャンセル可)。

本日の遍路距離=28km

(道隆寺門前の老人に頂いたお接待。小指大の地藏観音⇒)



【5月22日】 晴れ

国分寺門前～82番根香寺奥之院「鷲峰寺」～81番白峯寺～崇徳陵～82番根香寺～別格19番香西寺
～83番一宮寺～高松市瓦町

本日のハイライトは、保元の乱に敗れて讃岐に流されこの地で怨恨を残しつつ崩御、大魔王となって天下に大乱を起こさせようとした崇徳上皇魔道怨霊の鎮魂の寺である白峯寺と崇徳天皇白峯陵であった。

崇徳上皇と親しかった西行法師がこの地を訪れてその荒れ果てた墓前で魔道に落ちた上皇の霊と話をすることは、雨月物語の「白峯」に詳しい。怖い物見たさの性がある小生は、雨月物語は昔からの愛読書であったので、遍路とは関係なく一度はこの白峯を見てみたいものと思っていた。



(雨月物語「白峯」挿絵。左が魔道に落ちた崇徳上皇、右が西行法師)

崇徳上皇が亡くなった場所は実は昨日詣でた高照院（天皇寺）であり、近くにある「八十場」の霊水は、上皇の殯に使ったとして名高いので、そちらの方が上皇の鎮魂寺ではあろうが、高照院は集落の中にあるので“怨霊”というムードが無かった。やはり深い山中にある白峯寺の方が趣が深いし、また宮内庁管理の崇徳天皇白峯陵は今にも上皇の怨霊が現れそうな蔭鬱・神秘的な雰囲気であった。(下写真 左：白峯寺、右：崇徳天皇陵)



昨日巡拝する予定であったが時間切れのために行かれなかった根香寺奥之院「鷲峰寺」には是非立ち寄りたかったので、時間節約のために今回初めてタクシーを使った。タクシーの運ちゃんも岡山県倉敷市出身とのことで、お互い同郷の話が弾んだ。この辺りの小高い道を走っていると、瀬戸内海を挟んだ対岸の岡山県の海岸道路を走っている車のはっきり見えるのだそう。また、讃岐には溜池がゴマンとあるのだが、それぞれの池に漁業権が設定されていて、この漁業権を持っている人でないと小魚も釣ってはいけないのだそうだ。そういえば、小さな池にも立札が立っていて、「この池の漁業権は誰某に設定されているので、他の人は立ち入り禁止」と言う意味のことが書いてあった。池では鯉かスッポンを養殖しているとか言っていた。また蓮根などの栽培権もこの誰某にあるので、水利権を持っている農家でも蓮根なども掘れないらしい。

根香寺は、白峯寺と同じ五色台の深い山中にある山岳寺院であるが、その奥之院である「鷲峰寺」は平地の集落の中にあつた。本院と奥之院の在りが逆転しているような感じであつたが、根香寺は元々から山岳宗教の道場であつたそうだから、逆にこの奥之院はこの本院の山に登れない信者のための平地の遥拝所として創建されたのかも知れない。根香寺は標高が400mほどある山中なので、実際に登ってみても結構キツかつた。

奥之院「鷲峰寺」は廃寺ではないかと思える程素朴で閑散とした寺であつた。庫裏の土間のような所で寺女のような人から朱印を貰つたが、そこで朱印をいただくのではなく、かなり前に書かれたらしい納経紙を机の下からゴソゴソと探し出してきて「色が褪せたり紙が破れたりしているがこれでもよいか」と仰せられたので、有り難く頂戴した。



(鷲峰寺の素朴な本堂)

早朝に態々旅館迄迎車して貰つたのに旅館からこの寺までのタクシー代金は大した金額は出なかつたので、ここで降りては運転手に悪い気がして、そのまま次の白峯寺まで登って貰うことにした。結構な金額が出たが、マ、これも地元への喜捨と思えばよいのだと、楽な方法を採用したことへの言い訳とした。

白峯寺の様子は上述のとうりである。白峯寺から次の札所「根香寺」へ向かう遍路道はなかなか趣があつた。白峯寺の裏山の峠には塔身に円板笠型の石を埋め込んだ笠塔婆という珍しい卒塔婆があつた。この塔婆は摩尼輪塔とも呼ぶそうで、摩尼輪というのは仏道修行によって悟りを開いた究極の位のことだそう。ここから先は白峯の聖地に入る究極の地の意で建立されたもので、従つてここより先は一切の乗物を禁ずるといふ「下乗」の文言が刻まれていた。

白峯寺裏の峠の
摩尼輪塔⇒
(建屋の中。次
頁に拡大写真有)
この峠は、今に
も崇徳上皇の怨
霊が出て来そう
な陰鬱な雰囲気





(摩尼輪塔)

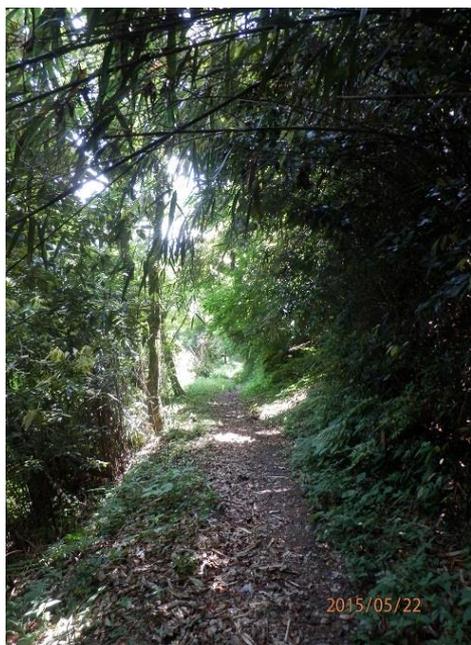


(ハーブ農園提供の「五色台遍路小屋」)

白峯寺から根香寺に行く途中にハーブ農園があって、農園主が提供している新築で清潔な遍路小屋があった。小屋の前庭にはビーチパラソルの下にお接待の氷入りの冷たいハーブ茶と飴玉が置いてあり、猛暑で喉が渴いていたので大変有り難く頂戴した。清潔な遍路小屋は二階建てで、「どうぞ自由にごゆるりとお泊り下さい」という看板があった。お接待の序に、ビールを冷やした冷蔵庫でも置いてあれば極楽極楽！なのであるが、マ、ここまで望むと閻魔様の罰が当たるかも・・・。農園の方が畑に水遣りに来られたので、ご喜捨の御礼を申し上げて世間話をした。先日も家族連れの遍路がこの小屋に泊まって行かれたとか。歩きで遍路していると、このように地元の人と世間話ができるという御利益もある。



根香寺からは、別格19番香西寺への山中の遍路道を下った。歩き遍路でも大抵は次の札所83番「一宮寺」へ直接通じている道路を下るので、途中誰にも遇わなかったが、この遍路道は静かなプロムナードコースであった。山麓からは屋島や高松沖の瀬戸内海の島々も足下に見えだして、讃岐の「涅槃の道場」もそろそろ終わりに近づいてきたことを感じさせた。



(根香寺から香西寺へのプロムナード道) (屋島が見えてきた、右奥の台地状。中央右奥の島は鬼ヶ島伝説で有名な女木島)

根香寺も香西寺も同じ「香」を寺号に使っているの、或いはかつては親戚寺であったのかもしれない。香西寺には遍路が殆ど来ないのか、納経所には「ご用の方はこのベルを」が置いてあって、ベルを押してから暫く経った後にオバサンが現れた。オバサンも、丁度良いところに話し相手が現れたと思ったのか、納経所で世間話を始めた。旦那は既に鬼籍に入ったが元々は北海道の開拓地にあった寺の住職で、縁あって夫婦してこの寺に流れて来たのだそう。当方も急ぐ旅ではないので、往時の北海道開拓の模様などの昔話を聞いて興味が湧いた。当時の北海道新天地開拓団の華々しい応募広告に騙されて北海道に渡ってはみたものの、与えられた開拓地は石ころだらけの原野でとても作物などが植えられるような土地ではなかったそうで、今更故郷に帰る術も無く、路頭に迷う生活だったという。今は、伊豆で病院や介護施設を営んでいる息子が自慢の、安穏な日々だそうで、誠に結構結構。

香西寺からトコトコと高松市近郊の田園地帯「鬼無^{きなし}」の里を歩いて83番霊場「一宮寺」に詣でた。この道は田圃の中の道で遍路みちしるべも人通りも無く分かりにくかった。途中にあった食料品屋で道を聞いた時に、お客で来ていた御婆さんがお釣りの五百円玉をお接待で下さった。お接待で現金を頂いたのはこれが初めてであったので多少戸惑ったが、喜捨の慣例に従って有り難く頂戴した。この五百円玉は、道隆寺門前で頂いた前出の指地藏観音の座布団となって、今は自宅の書斎机の上に鎮座ましましている。

本日はこの近くにある温泉ホテルに泊まる予定であったが値段が高そうだったことと、高松市街へ残り2里ほどの距離に近づいてきていたので、急に赤提灯の燈が恋しくなって高松の中心街「瓦町」まで走ってしまった。高松は、もう40年以上も昔のことになるが、仕事でよく出張した。その度に瓦町にあった料理屋によく通ったものだった。まだやっているかと歩いて見たが街には当時の佛は全く残っておらず、そのような店も見当たらなかった。店のオカミも当時既にオバサンであったからもう鬼籍に入っているのかも知れない。

6:30 糸びすや発、鷲峰寺経由、7:15~8:00 白峯寺・崇徳陵、10:30 根香寺、12:20 香西寺、16:30 一宮寺、17:30 高松瓦町
コトデン瓦町駅前・天然温泉付「スーパーホテル」泊（朝食付5,680円）、近くの焼鳥屋。

本日の遍路距離=40km

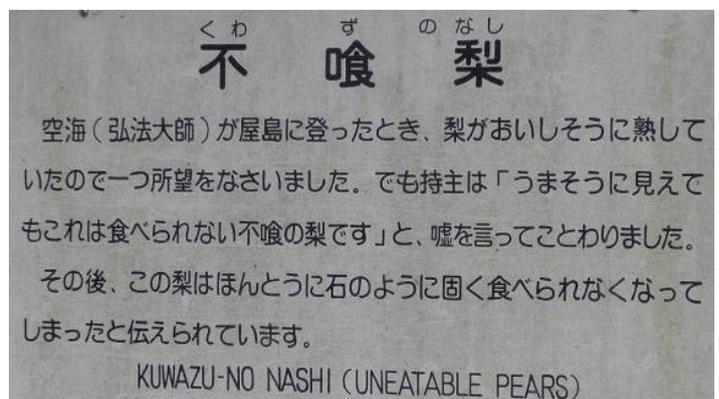
【5月23日】 曇り

高松瓦町~84番屋島寺~85番八栗寺~八栗寺奥之院「竹居観音」~志度

今日の遍路は、「屋島檀ノ浦」の源平古戦場で有名な屋島と八栗山（五剣山）である。場所は高松市街のすぐ東側の瀬戸内海。余談になるが、源平古戦場の「檀ノ浦」といえば、源義経率いる源氏軍が平家軍を最後の合戦で滅ぼし、僅か8歳の安徳天皇が二位尼に抱かれて入水して平家が滅びた山口県下関の古戦場を指すが、那須与一の扇的の有名な屋島の古戦場も「檀の浦」と呼ばれている。ただし、同じ「ダン」でも下関の方は土偏であるが、屋島の方は木偏である。

この日は丁度土曜日のせいか、屋島はウォーキングで登っている地元の老若男女で賑わっていた。風雨を厭わず毎朝日課で登り降りしているという老人が多かった。讃岐平野や瀬戸内海が一望だし、山頂までの距離も手頃なのでウォーキングコースとしての人気が高いらしい。

屋島山頂には観光協会の遍路休憩所があって、お茶をよばれた。観光ボランティアガイドの人が何人か詰めておられて、折角だから案内しますよと30分ほど案内して下さった。展望台から見える源平合戦の旧蹟や瀬戸内海の島々などの説明もあって、楽しかった。



(屋島寺への道の途中にはこんなものもあった)



(広大な屋島寺。門柱には古い字体で八嶋寺と刻まれていた)



(屋島展望台から五剣山を望む。手前の入江が檀ノ浦古戦場。町並みは牟礼、右奥の海は志度湾)

屋島からは檀の浦に下った。非常に急な下り坂で膝が泣きだして往生した。檀の浦には、平家の船の舳に女官が掲げた扇の的を射落とした那須与一が海中に駒を進めて扇を射たとされる「駒立岩」という岩があった。那須与一は生れは那須であるが、那須与一はこの扇の的の功績で我が故郷「備中の國・井原ノ庄」に所領を賜り、今でも那須一族の菩提所や公墓が私の生家の近くにある。那須与一自身がここに来たという記録は無いそうだが、那須一族が移り住んだらしい。井原市街の中心地である井原鉄道井原駅の駅舎は那須与一の弓と扇の的のデザインとなっている。

そのような関係から、遍路道から寄り道をしてこの駒立岩を見に行った。マ、今は干拓で住宅などが密集し往時の佛も無くなって単なるドブ川の珍奇なカラクリ舞台になっていたのが残念であった。

写真右の岩が駒立岩、満潮時には海面下に隠れる。左奥の看板は扇を掲げた平家船の女官を描いたもので、的はこの付近であったという。



八栗寺は特異な山容の八栗山（剣のような岩の尖峰が5峰ならんでいるので五剣山とも呼ばれる）の山腹にある。五剣山はJR高徳線や琴電志度線の沿線からその特異な山容が眺められるので見られた方も多いと思う。

5峰の中の1峰が宝永の地震で崩壊したので、今は「四剣」である。妙義山を小さくした山容を思い浮かべて頂ければ大体の想像ができよう。

ここには八栗寺に登るケーブルカーが敷設されていて、そのケーブルカーが走る音を聞きながら、横を通る遍路道をヨタヨタと登って行った。山上によくもこのような規模の堂宇を作ったと思えるほどの大寺であった。



(八栗寺と五剣山)



八栗寺の奥の院は、裏山にある五剣山であるが、崩壊が激しいのでここに登ることは禁止されている。（地元の山岳会などでは登られているようであるが・・・）。宗教学者の五来重によれば、ここの奥之院は五剣山を越えて更に山道を北に下った瀬戸内海の海岸の断崖絶壁の洞窟にもあったという（今は竹居観音）。四国の霊場では、山を金剛界、海を胎蔵界として巡拝する奥之院信仰が根強く残っている。元来、土俗信仰の海洋宗教から発した四国の行道（修業）は、常世の海（胎蔵界）と山中の窟（金剛界）の両方をグルグル廻るというものであり、これを「辺路」といった。これが今の遍路の原型である。従って、真の遍路は本院ではな

く奥之院の方を巡礼するのが正道である。よって、奥之院派の私としては、この八栗寺の胎蔵界である海の奥之院には是非行かねばナラス。

納経所でこの竹居観音へ行く道を聞いてみたが、寺から五剣山へ入る道は今は鉄門扉で嚴重に閉鎖されていて絶対に通行できないとのことであった。五剣山から竹居観音への道があるといことも御存じない風であったし、また、竹居観音がこの寺のかつての奥之院であったことも御存じない口振りでがっかりした。

試みに、持参していた地理院の五万図幅を見ると、破線（小径）が寺の横から五剣山を越えて瀬戸内海方面に通じていた。何とかこの破線に入る入口はないかと1時間程掛けて境内付近を隈なく探してみたが、それらしきものは見つからなかった（あまりにも癩だったので、帰宅してから地理院の2万5千図幅の最新版でチェックしてみたら、五剣山から瀬戸内海方面に直接下る破線は影も形も無く削除されていた。コン畜生メ）

それでも、ここの胎蔵界（海の奥之院・竹居観音）だけは見てみたいと、来た遍路道を檀の浦まで下ってバスで岬の突端の終点「庵治温泉」まで行き、そこから海岸を半時間ほど歩いて竹居観音を見てきた。竹居観音の目の前の静かな瀬戸内海のすぐ対岸には小豆島が浮かんでいて、荒々しい室戸岬や足摺岬のような奥之院行道の行場とは思えなかったが、それでも断崖の海蝕洞窟に室戸岬の御蔵洞よりも立派な祠が祀ってあった。



（竹居観音）

余談になるが、庵治半島は有名な庵治石の産地である。庵治石は石質が硬く肌理も細やかで彫った字なども数百年間は崩れることがないと珍重されている石材であり、ここでは平安の昔から採掘と加工が行われていたそう。先程の檀の浦周辺には今でも石材業者が軒を並べていた。前の P. 23 の写真でも石切り場がある山腹は大きく削り取られて情けない姿になっていた。

那須与一の扇的的の旧跡の近くに、世界的な石の彫刻家イサム・ノグチ庭園美術館があると聞いてまた寄り道をした。残念ながらこの美術館の見学は予約制だそうで、門扉が閉じられていて庭も覗けなかった。

イサム・ノグチは庵治石に惚れ込んでこの庵治に20年間移り住み、本拠のニューヨークを往復しながら庵治石の彫刻を彫り続けたそう。

バスでコトデン八栗駅に出て、そこからコトデンの志度駅まで飛天の術を使った。志度の町には平賀源内の生家や記念館などの旧跡があったが既に閉館時間を過ぎていた。



（平賀源内）

8:00 瓦町発、雨のため電車でコトデン「湯元駅」、9:30~10:30 屋島寺、13:00~14:00 八栗寺、15:45 竹居観音、17:30 志度。

宿は志度駅前通りの旅館「栄荘」（6500円、食事、サービス共最高。洗濯サービス、翌日の昼食弁当のお接待もあり）

本日の遍路距離=22km

【5月24日】 曇り後晴れ

志度～86番「志度寺」～87番「長尾寺」～88番「大窪寺」(結願)

四国88ヶ所霊場巡礼も、愈々最終日となった。
昨日納経所が閉まっていたので巡拝できなかった志度寺に朝一番で詣で、時間節約のために次の札所87番長尾寺までタクシーを使った。長尾寺からは田園地帯の一本道を結願の88番大窪寺までトコトコと歩いた。日陰も無い暑い道だった。

途中の前山ダムには道の駅や公民館があり、そこに遍路サロンなる遍路資料展示館が併設されていた。大窪寺までの丁度道半ばの場所であったので、立ち寄ってお茶を頂戴し、昔の遍路装束や納札などの遍路展示品を見せて頂いた。ロビーには四国88ヶ所のジオラマが展示されていて、阿波の1番札所から讃岐の88番札所まで順に辿って行くと、よくぞ歩いて来たものだと思ながら感

心した。見終わって退出する時に、稿末添付のようなものを頂いた。ここを訪問する歩き遍路には誰にでも配付されているものであろうから、さほどの有難味は無かったが・・・。



(長尾寺から大窪寺への道。)

大窪寺は中央奥の山を越えた更に先)



ここからは愈々大窪寺への最後の登りとなった。大窪寺への道は2本あって、一つは短いが高標高い女体山を越えて行く山道、もう1本は大回りではあるが、額峠を越えて助光から横川の山峡沿いに一旦徳島県境に近づきながら、山奥に点在する小聚落を拾って辿る旧遍路道(大窪道)と呼ばれている道である。「女体」にはもう飽き飽き!!したし、ここの遍路サロンの人も後者を薦めてくれたので、トコトコと山中に入って行った。今朝志度の旅館で頂いた弁当を山畑の傍の出作り小屋に座って頂いた。

札所最後の大窪寺は大寺ではあったが、よくもこんな人里離れた山奥に作ったものだと思わせるような辺鄙な場所にあった。結願祝に門前の茶店でビール一杯でも頂戴したかったのであるが、この日の内に和歌山県の高野山奥之院に御礼詣でに向けて出発したかったので、午後1本しか便が無い「さぬき市営コミュニティーバス」に飛び乗って大窪寺を後にした。

考えてみると、阿波の1番霊場から2ヶ月間近く掛けてここ88番霊場まで猛暑や雪の中を歩いたのであるが、その割には結願したという感懐はそれほど感じなかった。マ、小生の場合、背に負っている荷（大抵の歩き遍路は業や病や苦などの重い荷物を背負って歩いている人が多い）も重い荷物は何も無く、単なる物見遊山と同様であったから、仏様の慈悲も何も無かったのであろう。また、「通し打ち」ではなく、5回に分けた安易な「区切り打ち」で巡ったことも一因かもしれない。

次回2回目は通し打ちでオール野宿でもして廻りたいが、背に背負う「荷物」が軽ければ、やはり同じ結果に終わるのかも知れない。嗚呼。

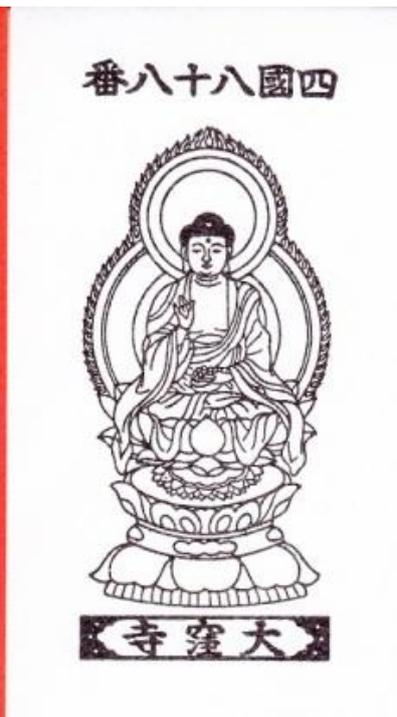
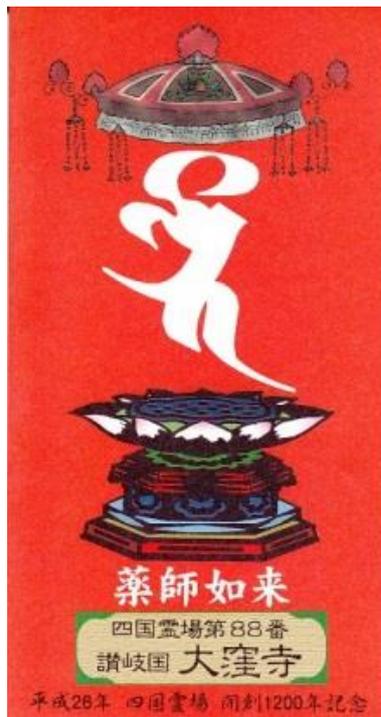
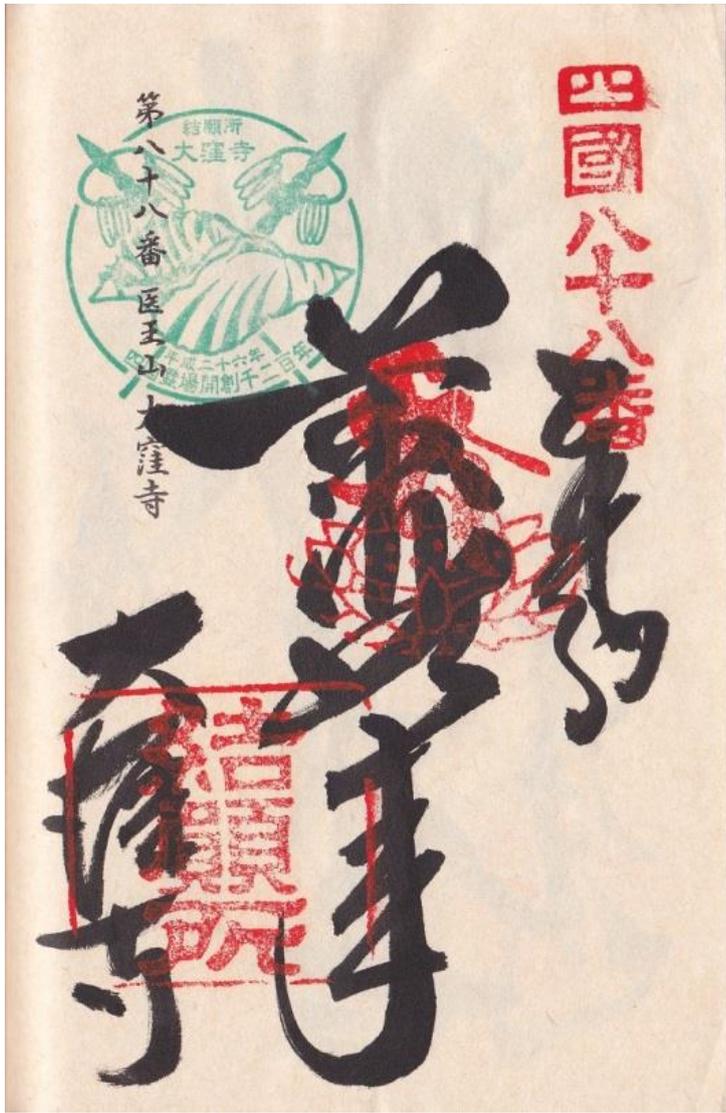


(結願の88番大窪寺)

(結願はしてみたものの・・・⇒)



かような結果、かような御利益は期待すべくもなかった！！



四国八十八ヶ所遍路大使任命書

Shikoku 88 Temples Pilgrimage
Henro Ambassador

(第 3031 号)

神奈川県 大塚 忠彦 殿

貴方は四国八十八ヶ所歩き遍路約 1,200km を完歩され、
四国の自然、文化、人との触れ合いを体験されたので、
これを証すると共に、四国遍路文化を多くの人に広める
遍路大使に任命致します。

*This is to certify that you have successfully completed the 1200km of Shikoku
88 Temples Pilgrimage on foot and that you are named as a Henro
Ambassador. We wish that the interaction with the people, the culture and
the nature of Shikoku enriches your life and that you will spread the Henro
culture worldwide.*

平成 27 年 5 月 24 日

Date. / /

NPO 法人ループ 88 四国

理事長 亀岡 孝平

Not Profit Organization LOOP 88 Shikoku
Director General Kohei Kameoka

NPO 法人遍路とおもてなしのネットワーク

理事長 木村 大三郎

NPO Network for Shikoku Henro Pilgrimage and Hospitality
Trustee Daizaburo Kimura国際ロータリー 第 2670 地区
2014-2015 年度ガバナー

佐々木 善敬

The International Rotary Foundation, district no.2670
Governor of 2014-2015
Zenkyo Sasaki

さぬき市前山おへんろ交流サロン

代表 大山 茂樹

Maeyama Henro Cultural Exchange Salon, Sanuki City
Representative Shigeki Oyama

6:45 志度駅前旅館発、7:00 志度寺、7:30 長尾寺、9:30~10:30 前山・遍路サロン、14:00 大窪寺、20:00 岡山駅
本日の遍路距離=20km (志度~大窪寺参拝まで)

〔「第 1 回歩き遍路」讃岐ノ巻 了〕

〔『第 1 回四国歩き遍路紀行』 完〕

「第 1 回歩き遍路」目次に戻るには、ブラウザーの戻るボタン  で戻って下さい